

■ 明けましておめでとうございます。

旧年中はお世話になりました。本年もよろしくお祈りいたします。

■ 平成27年度研修旅行

平成27年10月12日(月)に白鷹町史談会の研修旅行を行いました。

今回の白鷹町史談会研修旅行は、①東北の仏教の始まりの地といわれる福島県勝常寺、②深山観音堂の本尊の姿が偲ばれる恵隆寺立木観音、③白鷹町大瀬の五十公野氏の故郷ともいわれる新潟県新発田市五十公野(いじみの)城址と新発田城、という「根源(みなもと)」を訪ねる旅でした。会員以外の方も含め、マイクロバス定員いっぱいの28名の方々の参加でした。



会員の菅野四郎さんに参加した感想を書きいただきましたので掲載します。

(感想) 根源を訪ねる 史談会研修

菅野志郎

仲秋の候、10月12日の中央公民館前7時半、27年度研修旅行に参集された方々28名。

天気は最高の旅行日和となった。目的は「根源を訪ねる」で、会津地方の仏教の誕生を知り、古刹を訪ね、深山観音堂に繋がる坂下町塔寺「立木千手観音」を詣で、湯川村瑠璃光山密蔵院勝常寺、徳一上人が平安時代に開いたと言われる東北を代表する寺院を訪ねた。過去2~3回会津地方、慧日寺や会津大仏願成寺、中田観音、西会津鳥追観音にも廻ったが、まだまだ良く理解できていない。

この度2つ目の根源として五十公野(いじみの)城跡と大瀬地区五十公野(いずみの)姓とのか

かわりを持つと、新発田城を訪ねた。そこで新発田城に置いてあった陸上自衛隊新発田駐屯地のパンフレットの裏面には「天正15年(1587)第18代新発田(佐々木)因幡守重家は上杉景勝と勇猛果敢に戦ったが、奮戦及ばず壮烈な最期をとげ佐々木三郎盛綱(大江源氏=第59代宇多天皇に発した宇多源氏とも云われる)以来400年にわたる下越の名家佐々木氏は滅亡しました」と書いてあった。その時自分ではもしかしてという疑問があり、思い浮かんだのが古文書の先生佐藤与七さんが、7年前史談会講演会「栃窪・山の神の神像」についてお話して下さった時のことで、山の神御堂修復時寄付戴いた奉納額の筆頭に「二百文 佐々木某」とあった事だった。栃窪集落はほとんど土屋姓なのに「佐々木」には違和感が残った。言い伝えに栃窪の佐々木は成田の佐々木という人もあり、確実な事を知りたいと10月28日長井図書館を訪ねた。『長井市史』には見あたらず、司書の方をお願いして致芳郷土誌や成田の記録を出していただいた。昭和57年10月31日発行。長井市致芳史談会編『御本陣の記録(付)佐々木家の人々』があり、克明に記載されている。

佐々木家系図書によれば先祖は宇多天皇より始まっているが真偽の程は別として江州(近江)から越後の武将として新発田附近を統治していたが、戦運拙く越後を脱出するが佐々木家が吾が実家の成田に住む様になったのはどういういきさつからであろうか。手掛りとなるものは多くは埋滅してしまっている。天正8年12月新発田因幡守重家、三条道如斎(五十公野)が謀逆を起こし上杉家と対峙する。

上杉の記録三重年表では謀逆と記しているが必ずしもこの言葉が妥当とはいえない。謙信が病気で倒れ、北条からの養子景虎と景勝の跡目争いで、新発田、五十公野(道如斎)は景勝を応援し勝利したが、恩賞をめぐるごたごたから上杉を離れ豊臣秀吉に組みする。凡そ八年程幾度かの攻防が繰り返されたが武運なく破れ天正十五年因幡守治長(重家の子)、道如斎らが滅され同家ごとく断絶してこの戦いは終わった。この戦いに会津の領主芦名義広は窃かに新発田に糧食と兵員を送り援護している。落城の折城内には多数の芦名の将兵が運命を共にしたという。佐々木守景や五十公野城家臣も会津の芦名に逃れたのも妥当な成り行きと言うべきであろう。

新発田落城は奥羽編史料によれば天正15年(1587)10月19日、ちょうど伊達政宗が鮎貝城宗信を攻め、落城したのは10月4日。殆ど同時に相継いで滅んだ事も不思議な因縁である。天正17年(1589)7月芦名氏が会津より追われ、秀吉は伊達の横暴をいきどおり景勝と佐竹義重

に芦名を救うよう命じている。天正 18 年 8 月 9 日秀吉が会津に来て政宗が侵略した会津四郡、仙道五郡を蒲生氏郷に与え会津に居城せしめた。伊達は宮城岩出山へ。このような四囲の中で佐々木氏は上杉が領する下長井へ。更に上杉の追跡を逃れ、栃窪に隠れ住むのである。潜伏 20 数年、世変じ栃窪を去り成田に定住。その後の成田では代々名家として隆盛をなし、一代苗字帯刀を免許、上杉藩の御本陣となり延享元年（1744）から慶応 3 年（1867）にわたり 125 年もお殿様の宿泊、本陣を務める、等々明細に記載されていて新しい発見もあった。

今回の旅行では五十公野城跡で地元の方々のお話がありましたが、新発田の事は何もなく大瀬地区の五十公野姓の人々と、最上川を挟んで栃窪に隠れ住んだ佐々木氏は何の交流もなかったのだろうか。又、新発田市の歴史史料も知りたいが後日に譲りたい。自分にとって新しい発見で楽しい「根源を訪ねる」旅行であった。

## ■ 白鷹町周辺の石造文化財（その 1）

### 平吹利数

白鷹町周辺にも多くの石造文化財が残されている。その中でも珍しいものをいくつか紹介したい。



長井市成田久保町の塔様

（高さ 191 cm 初層幅 52 cm 角・高さ 39 cm）

長井市成田の最上川沿いの工業団地の南部が久保町と呼ばれるところである。そこにこの石塔がある。

弁慶が義経に同行して平泉に逃れる旅に同行していた弁慶の娘がこの地で急病になり、旅を続けることができなくなった。そこでこの地の民家の男と結婚して止まることにした。やがて、弁慶の死を知り、その供養のために建立したのがこの塔であるとの伝承がある。

伝承によれば鎌倉初期（1200 年ごろ）になるのだが、石塔の屋根部分の反りの形から鎌倉時代末と推定でき、伝承よりも 200 年ぐらい下ると思われる。



長井市白兔光明寺跡 残欠五輪塔

（花崗岩製 火災に遭い割れている）

白兔山中の光明寺跡にある五輪塔。現在残っている部分は「空輪」（キャ）と「水輪」（バク）であるが、重ねの方位は両方とも違っている。「空輪」の突起の形状が鎌倉末から室町前期と推定できる。「水輪」の下に台座が 2 段あるが、これは別の石造物のものである。



六道の辻六地蔵 護讃地蔵（高さ 94 cm）

長井市白兔の六道の辻に 6 基の石碑に刻まれた「六地蔵（1 法生寺蔵、2 讚龍地蔵、3 護讃地蔵、4 合掌地蔵、5 陀羅尼地蔵、6 延命地蔵江戸時代の「仏像図彙」による名称）」がある。そのうちの護讃地蔵。「護国 □□享保十八年供養／南無護讃地蔵大菩薩／安全／癸丑八月二十四日（「日」は「キツ」と読み、願うの意）／導師／全龍院」と刻まれている。

## ■ 宮田稔著『忘れられた詩人の伝記 父・大木惇夫の軌跡』を読む

### 丸川二男

「大木惇夫」という名前には以前から少なからず関心があった。というのも、数年前、かつて自分が在籍した荒砥高校の校歌の作詞者が大木惇夫その人でありながら、学校関係者や周囲の人を含めて、校歌が作られたいきさつについて、あるいは「大木惇夫」その人についてほとんど関心を持っていないことに気が付き、その周辺を調べたりしたことがあったからである。

結果、事務室の金庫の中から大木惇夫自身の手紙と電報が見つかったものの、肝心な校歌の作られたいきさつはわからなかった。ただ同窓会誌に小文を書いたりしたので、この人の名前は、以前よりは少し知られたであろうか。

そもそも在学中は「大木惇夫」という人のことを誰からも聞いた記憶がない。ただ、講堂の校歌の額を見て記憶していたにすぎず、後年、近代詩人としてひんぱんに出てくる叙情詩人と、同じ名前の人がいるのかもしれないと思っていたぐらいである。山形の田舎の小さな高校の校歌が、著名な詩人によって作られたとは思えなかったからである。

ところが校歌はその著名な近代の叙情詩人によって作られていたのだが、まわりではほとんど関心がない。これには少しがっかりした。大木惇夫という名前は、この土地ではほとんど知られていないのである。わずかに国語や音楽の教員に知っている人がいた。音楽の方では合唱コンクールの課題曲を作詞していたことによるもので、近代詩を専攻して名前を語る人には会ったことがないほどである。そこで私は例の懐メロの「国境の町」を引き合いにして、その作詞者と同じ人であることを話したりした。

一方、以前にここの土地の詩人・芳賀秀次郎のことを調べている時、「われら愛す」という公募された作詞の選者の一人に大木惇夫がいたことは知っていた。当時、この分野で活躍していた第一線の一人でもあった。

それにしてもなんと重い本である。480 ページで、価格も税込みで5,000 円余と値段もいいが、何よりも中身が実に重たい。この本の中には、

- ・大木惇夫のこと・詩の鑑賞と批評
- ・先輩詩人の白秋や西條八十のこと
- ・詩人仲間との交流や小説家のこと
- ・複雑な家族のことや「六時礼賛」のこと
- ・戦前から戦後の暮らしのこと
- ・韓国詩人・金芝河の救援活動のこと
- ・サルトルを学ぶこと

などについての豊富な記述があり、筆者自身の個人史とも、戦前・戦後史とも読めるもので、大木惇夫の詩の紹介とあわせて興味深く、私は何度も読むことを中断せざるを得なかった。

この筆者の年代は戦前から戦後にかけての激動の時代を生き抜いた人たちであり、その知恵や努力を無駄にしてはならぬとつくづく思う。父がいつも不在。やがて母も仕事のために家をあける。残された子供らの日常。新年の雑煮に鶏肉が入っていて、それが昨日までかわいがってエサをやっていた黒いチャボだったりする。そんな暮らしぶりがさりげなく綴られているのも魅力である。

正直なところ、私はこの本が出たこと（2015.4.25 刊）を知らずにいた。夏に湯殿山参りをするための下調べや、秋の「芳賀秀次郎百年祭」のことに頭を使っていたせいだろうか。それらが一段落した頃、ネットで「国境の町」を聞いている時だったか、画面の脇にこの本の紹介記事が見えたのである。

早速に図書館でさがしてもらったが、県立図書館にもなく、公立の図書館では県内で鶴岡市立図書館だけにあった。少し情けないような話である。人に聞けば新聞に書評があったとかで、調べたら9月15日のもので、共同通信の配信らしく書いた人の名はなかった。いずれにせよ、この本のおかげで私は随分と今まで知らずにいたことに接した気がする。広範な仕事をした人であるだけに、この著書を通じて大木惇夫、その人と仕事の見直しがさらに進むことを期待したいと思う。

（参考 守谷追記）

大木 惇夫（おおき あつお、1895年〈明治28年〉4月18日 - 1977年〈昭和52年〉7月19日）は日本の詩人・翻訳者・作詞家。本名は軍一（ぐんいち）。

1932年までは篤夫（あつお）と名乗っていた。太平洋戦争（大東亜戦争）中の戦争詩で有名だが、児童文学作品他、「国境の町」などの歌謡曲、「大地讃頌」をはじめとした合唱曲、軍歌（戦時歌謡）、社歌、校歌、自治体歌の作詞も多い。

1967年紫綬褒章、1972年勲四等旭日小綬章。（オンライン百科事典「ウィキペディア」より）

## ■ 紬糸と苧麻のこと

守谷英一

この秋は結城紬と越後上布（小千谷縮、越後縮）のことなどを調べて歩いた。もっとも日和のよい9月半ばから11月にかけては思わぬ事故によってあまり活動できなかったのが、9月初めに栃木県小山市と茨城県結城市に行ったのと、11月に入ってから新潟県小千谷周辺に行ったのが主な調査旅行であった。

結城紬は紬糸を使う。それも撚りを掛けない無撚の紬糸である。真綿から糸を引くがその真綿は福島県の保原のものであるようだ。

結城の糸屋さんが真綿を買って、それを結城市周辺の人が糸にする。結城紬は無形文化財に指定されていることもあって品質は厳しく管理されている。真綿をひいて糸にした人が誰であるかということを検査表に書かないと検査を受けられない。

だから、糸も高価である。1反に使う糸代が10万円を超えると聞いた。



地機で結城紬を織る石川美津子さん 2015.9.8

越後上布の糸は青苧から採った苧麻（チョマ）である。福島県昭和村で育てられて青苧から繊維を取りだしたもので新潟県へ入ってくる。それを細く割き、1本1本をつないで（この作業を「績む（うむ）」という）糸にして機にかける。かつては経糸にするものと緯糸にするものは績み方も違っていた。また、経糸と緯糸を生む地域も別れていたという。何れも冬の手仕事であった。

1反分の糸を績むのに1冬かかったという。私も体験で績ませてもらったが、どうやっても引っ張ると抜けてしまう。績み手の手先をよく見ているのだが、いとも簡単につないでゆく。見ると簡単そうだが実際にしてみるのとは大変なことだと思った。だから糸の値段も高価なものになる。

この両方の布は地機（かつては「いざり機」といっていた）によって織られる。現在手織機として普通に見られる高機の3分の1程度の効率で、手の込んだ緋の模様となると1反を織るのに半年もかかるという。このようにして織られる布だからちょっと手が出ないほど高価になるのも無理のないことだと納得した次第。

さて、紬糸も青苧も実は私たちの身近にあるものである。米沢藩時代は青苧がこの地区の特産物であった。一説によると米沢藩の青苧やとなりの村山の最上苧の品質がよくて大量に越後に入った結果、小千谷や魚沼地方の地元の青苧栽培が廃れたという。その後はこの地区の青苧栽培は廃れてしまったが、その遺物が野生化してあちこちに見られる青苧ということになる。

また、養蚕地域であるこの地区でも真綿から糸を引き紬糸にして織っていた。それが白鷹町や長井市の紬織物の源流である。昭和50年ごろまでは多くの家で機を織っていたから、箆笥の奥に自家の糸で織った紬布が眠っている家も少なくない。

長井市西根で真綿から糸を引く作業を見せてもらった。その時の引いた糸は無撚の紬糸で結

城のものと同じであった。小松織物工房で聞いたら紬織に使う緯糸は無撚の紬糸であるとのことだった。結城との不思議なつながりを感じた。

実はこのような糸を作る技術は高齢者が担っていて、後継者不足に悩んでいるという。だから、このような技術を持った高齢者は必要とされ続けている。自分の様に何の技術も持たないものは何をもって世の中に必要とされ続けられるだろうかなどと考えさせられた時でもあった。

## ■ 研究会や来年のことなど

本年度の研究会を下記のように行います。

- 1 日時 平成28年2月13日（土）  
13:30～16:30（予定）
- 2 内容 「道智道 湯殿山巡礼の道」（仮）
  - 1 基調講演  
原淳一郎（米沢女子短大准教授）
  - 2 報告 湯殿山道智道を歩く（仮）  
伊藤 隆（白鷹山岳会事務局長）  
志田菊宏（湯殿山神社宮司）  
布施範行

（六十里越街道山船頭協会）

予定

今回の研究会は平成27年8月に丸川会長などが実際に道智道を歩いて湯殿山に参詣した時の報告会です。道智道を歩くのは昭和54（1979）年9月に故奥村幸雄氏や「柳田国男を読む会」のメンバーが歩いて以来のことですから36年ぶりのこととなります。

かつては、会津や新潟から白鷹町を経て湯殿山へ行く湯殿山への参詣路として賑わい、この道を通る人の宿泊所や休憩所として黒鴨集落は賑わったとも聞いています。その歴史と現状について考える機会としたいと考えています。

参加申込みは2月5日（金）までに教育委員会 舩山さんへ。

なお、懇親会が予定されています。会員は1,000円、会員外は1,500円です。

平成28年度総会を下記のように予定します。

- 1 日時 平成28年5月28日（土）
- 2 総会 役員改選を予定
- 3 研究発表 渋谷敏己、平吹利数（予定）
- 4 懇親会

例年より早く予定しました。毎年何とかこの時期にできればと考えています。

その他、空き家が多くなるにつれて、教育委員会に蔵の解体をするので中を見て欲しいという依頼が時々来るようです。私（守谷）も教育委員会の舩山さんと一緒に行ったことがあります。解体に際して貴重な文書などが失われることがありますので、会員のみなさんの御協力をお願いします。